

現代中国を知りたいければ、まず胡鞍鋼博士の著作を
中国を代表する政策学者であり、私が心から尊敬する友人、胡鞍鋼博士の著書が、わが国で初
めて翻訳出版されることになった。とても嬉しい。
驚異的な発展を続ける中国に、ますます日本中の関心が深まっている。中国を紹介する書物や
雑誌も、店頭にあふれている。

しかし、私は断言する。「現代中国について知りたければ、何をおいても、まず、胡鞍鋼博士
の著書を読むのがよしい」と。

それは、なぜか。本書に目を通せば、読者はたちまち納得するはずだ。

ここでは、解説をかねて、胡鞍鋼博士の仕事と本書の内容について、ここが読みどころだとい
うようなことを、述べてみたい。

胡鞍鋼 (Hu AnGang 1953-) の名前は、まだ、日本でそれほど知られていないと思う。けれ
ども、少し中国に詳しい人なら、必ず名前をどこかで聞いたことがあるはずだ。香港のある雑誌
は、胡博士を、朱鎔基元首相の「ブレン」と呼んだこともある。誰かの「ブレン」だとはい
えないと思うが、胡博士は中国の党・政府の指導者に提言を行なうことができる立場にあるし、
実際に指導者たちが、その提言を重視していることは確かだ。経済発展、失業、地域格差、環

境、腐敗問題……。中国の直面するこれらの問題について、もっとも大胆で科学的な政策提言を
続けているのが、胡博士である。

胡鞍鋼博士の名前は、中国国内はもちろん、アメリカやフランス、ロシアなどにも鳴り響いて
いる。胡博士の専門、中国研究の分野で、もっとも信頼できる分析を提供する学者として、世界
中の注目を集めているからだ。日本にこのようなタイプの学者がいるかと考えてみると、ちよつ
と見あたらない。胡博士の経歴と、研究のスタイルについて説明し、私がなぜ彼を日本の読者に
紹介しようと思ったのかを理解してもらおうと思う。

胡鞍鋼博士は一九五三年生まれ。文化大革命後期の「上山下郷」(都市の青少年を地方の農村に追
いやる)政策で、小学校を終えるときも僻地の農村に送られ、農民の厳しい現実を体験する。
いわゆる文革世代である。このときの経験が、胡博士の研究の原点になっていると思う。父親が
持たせてくれた中学高校の教科書で自習を続け、ついに大学が再開されると、難関を突破して、
唐山工學院の冶金学科に入学した。北京科学技術大学の大学院に進み、一九八八年、中国科学院
の自動化研究所で工学博士の学位を取得。この頃から経済学を独学で学び、発表した論文が認め
られて、アメリカのエル大学にポスドク研究者として留学する。帰国してからは、中国研究
(政策科学)に分野を移し、中国科学院に設けられた国情研究中心(中国研究センター)で活動した。
胡博士が一九八〇年代末にまとめた「国情研究報告」は大反響を巻き起こし、以来、政策科学の

第一人者として活躍を続ける。一九九六年からは清華大学教授を兼任し、国情研究中心の主任と
して、「中国国情研究分析報告」のシリーズを発表しつづけている。このシリーズは、二〇〇二
年一〇月の時点で四七五号(ということは、ほぼ毎週一号の割合)にもなる。

胡博士は、党・政府の指導者たちに対して、内部資料のかたちで、国情分析や政策提言を行な
っている。従来中国の知識人とよく似ていると思われるかもしれない。けれども、胡博士
は、「研究テーマは自分で決める」「内部資料のかたちで党幹部に報告したものは、一般読者に向
けた書物のかたちでも発表する」というユニークな原則を掲げて、それを実行している。これ
は、従来の中国の知識人が、党の指導者や政府の依頼を受け、その意向にそった政策を立案する
か、それとも、党や政府と無関係に無責任な批判をのべるか、どちらかだったのに対して、画期
的なことなのだ。

胡鞍鋼博士は、このような新しいタイプの独立系知識人の、パイオニア的存在である。現代中
国を代表する政策科学者の第一人者として、内外の注目を集めているのも当然である。

胡鞍鋼博士の基本的な立場

二〇〇三年三月一〇日、北京の清華大学の宿舍(甲所)にいた私を、胡鞍鋼博士が訪ねてきた。
そして、彼の新著『影響決策的国情報告(政策決定に影響する中国研究レポート)』(二〇〇二年二月、
清華大学出版社)を手渡してくれた。胡博士が精力的にまとめている「国情研究報告」のうち、重

要なものを抜粋してまとめた論集である。その裏表紙には、つぎのように書いてある。胡鞍鋼博
士の立場を、はつきり示すものだと思う。

「一個宗旨、五個優先(二つの基本理念、五つの優先課題)」の原則が、本書の核心をなしている。
「一個宗旨」とは、「富民為本(人民を豊かにすることを根本にする)」という基本理念である。「五個
優先」とは、さまざまな発展の目標を選択する際には、就業の確保を優先すること。さまざまな
改革プランを実施する際には、社会保障システムの改革を優先すること。改革・発展・安定の三
つの関係を調整する際には、安定を優先すること。公共サービスと所得の分配の領域では、公平
を優先すること。内需を拡大し消費を刺激する際には、都市部や農村部の低所得層の人びとの利
益を優先すること」

中国の現実を考えるなら、こうした政策指針は、きわめて現実的なものだといえる。「先に豊
かになれるものから豊かになれ」という号令で始まった鄧小平の改革開放政策が、国内に生み出
したさまざまな矛盾を、正面から受け止めるものだ。そして私は、この胡鞍鋼博士の政策理念の
根底に、「人民に服務する」という毛沢東的な中国共産党の精神が流れているように感じる。

農村で十代を過ごしながら、苦学して大学に進んだ胡鞍鋼博士は、もともと理工系の研究者だ

った。どんな議論にも必ず数字(データ)の裏付けを求める厳密さに、その持ち味が表れている。そして、問題の拡がりや、学問の垣根にかまわず追いかけていく全体的な思考法は、彼独特のものである。胡博士の国情研究中心での活動は、それまで中国になかったタイプの政策科学の試みとして、驚きをもって迎えられた。そして、中国の「国情」にふさわしい、中国独自の社会科学が発展していった。

中国の「国情」を理解するのに、これまでの社会科学の常識はあまり役に立たない。

たとえば中国の経済は、市場経済であるという。しかし、中国の市場には、国营企業、郷鎮企業、外資企業、合併企業、私営企業が混在している。リカルドやマルクスやケインズや、近代経済学の学説がまったく想定していない事態だ。そこには、市場法則が働くとしても、経済学の教科書に書いてあるのとは違った、ねじれや歪みを伴うだろう。中国社会の実態をよく知らなければ、経済理論を現実に応用することはできない。

またたとえば、中国の政治理念は社会主義であるという。冷戦が終わったあとも、中国共産党の一元支配が続いている。しかし、中国共産党はもはや、古典的なマルクスレーニン主義が描いたような労働者・革命勢力の前衛党ではない。また、民主主義の政治システムとも異なっている。中国共産党の統治の実態を理解するのに、これまでの政治学はあまり役に立ってくれない。

胡鞍鋼博士の分析は、一方で西歐的な、正統的な社会科学の学説に忠実である。中国社会においても成立する、人間社会に共通する因果関係を正確に押さえようとする。その一方で、胡博士

はそうした正統的な学説の限界を明確に意識し、それをほみ出る中国の現実を正確に把握しようとする。その際、彼は公式統計に表れた数字を多用するが、その数字をもってくる手並みは、経験に裏打ちされた直感に基づいていると思う。誰にでも真似のできるものではない。

このような意味で、胡鞍鋼博士は、現代中国の「国情」から生まれるべくして生まれた社会学者、政策学者なのである。

この本の概要について

本書には、現代中国の抱える矛盾や課題と直面し、分析し、政策提言を行なう論文が集められている。本書に目を通せば、現代中国を考えるうえで重要となるポイントを、ひと通り理解することができるはずだ。

まず序文で、胡鞍鋼博士は、「二つの中国、二つの制度」「二つの中国、四つの世界」「一つの中国、四つの社会」をキーワードに、中国国内の格差と多様性に目を向ける。そして、都市化による余剰農業労働力の吸収、西部大開発と社会保障の充実、飛び石型の発展戦略といった、明確な政策指針を提案する。けっしてバラ色ではない中国の、将来を見据えた現実的な提案である。

第一章「中国はいかにして国民の富を生み出すのか」で、胡博士は、購買力平価で評価した中国の経済規模が、二一世紀を迎える時点ですでに日本を追い抜き、アメリカについて世界第二位となったと指摘する。巨大な中国市場が、世界に登場した。そのうえで胡博士は、中国が、人的

資本への投資を重視すべきだと説く。具体的には、農村差別をやめて、教育や社会保障に力を入れること。農村の発展を促さないと、中国は次の段階に進めないとする。

第二章「中国はいかにしてアメリカに追いつくのか」では、「できるだけ早くアメリカに追いつき、追い越す」ことが、中国の発展目標だと断言する。しかも胡博士は、経済指標だけに目を奪われてはいない。生活の質、教育、情報インフラ、都市化なども重視すべきだという。ここでも中国の農民大衆に、温かな目を向けている。

第三章「中国当面の経済情勢とマクロ・コントロール政策」では、中国経済がこれまでになく順調であること、今後は内需拡大を目指すべきことをのべたあと、都市の失業問題、農民の所得減少の問題が「重大な挑戦」と指摘する。とくに、政府の農産物買い上げ価格の下落によって、農民の収入が大きく落ち込んだという事実は、重要だ。これに対する胡博士の処方箋は、非正規の就業形態を増やすこと、農村から都市への労働移動を促進すること、市場の対外開放をはかることなど、現実的かつ大胆である。

第四章「WTO加入後の農政問題」では、中国最大の問題は農業だと断言する。中国の農産物価格は、国際価格よりやや高めなので、WTO加盟後、上昇することはない。中国は膨大な農村の余剰労働力を抱えている。胡博士は、そこで、農民の利益を守るために、政治参加や経済参加の制度づくりを提案する。各レベルの人民代表大会で、農民代表を全体の三分の二以上に増やすこと。農民を農村に縛りつけている「戸口(戸籍)制度を廃止すること。政治的民主化のための

思い切った提案だ。

第五章「三つの代表」論と政治改革」では、江沢民主席の唱えた「三つの代表」論を支持して、特権的な利益集団となった中国共産党の現状を批判する。そして、共産党が「もともと広範な人民の根本利益を代表する」には、社会の公正と安全など五つの目標を、とくに貧困地域や貧困層の人びとのために実現しなければならぬとする。共産党を下から監督するための政治参加の制度づくりの提案も、注目される。

第六章「市場経済秩序の立て直し」では、中国に蔓延する地下経済の実態が、明らかに。政府の各種統計を駆使し、地下経済の規模を推計する胡博士の手腕がすばらしい。また、知的財産権の保護など、国際規準にあわせて中国の市場を組織しなければならぬと、正論をのべている。

第七章「中国非正規就業状況分析」では、中国で今後、非正規就業が増えざるをえない事情が明らかに。都市に流れ込んでいる「農民工」の多くが、もともと農村で農業に従事していたが、さまざまなことなどが、新鮮な指摘である。

第八章「独占打破という社会・経済の大変革」では、電力業をはじめ多くの分野で、独占による不当な利益や民業圧迫が顕著で、腐敗の原因となっていると指摘する。胡博士の改革プランは、電力はもちろん、通信、郵便、航空、鉄道、水道、ガスなどの分野に及ぶ。わが国の、規制

緩和・民営化にも通じる興味深い問題だ。

第九章「腐敗問題の実態と腐敗防止の総合戦略」も、衝撃的な論文である。胡博士は、地方幹部にアンケート調査を行ない、彼らの多くが、腐敗をなんとかしないと「亡党亡国」の危険があるとの厳しい認識を示していることを指摘する。別な論文「巨大な腐敗黒洞…公開披露各種腐敗的経済損失」(巨大なブラックホール…さまざまな腐敗の経済的損失を明らかにする)「中国国情分析報告」第四〇〇期(二〇〇二年二月二十八日)で、胡博士は、腐敗の規模を中国のGDPのなんと一四・五〜一四・九%にもぼると推計している。腐敗問題が、共産党の正統性を脅かしかねない重大な問題であることを、胡博士は深刻に憂慮しているのだ。

第十章「私たちの国情認識と政治・経済・社会主張」は、胡博士の数年前の著書『中国発展前景』(浙江人民出版社、一九九九年五月刊)の序文として書かれたもの。中国の現状と将来についての胡博士の考え方がよく表れている文章なので、本書に採録した。この文章からもわかるように、胡博士は、経済や政治や環境といった特定の専門に収まり切らない、全体的な連関を見据えて仕事を。必ず根拠となる数字を示しながら、どんな問題も科学的に、厳格に論じていく。胡博士の精神が、この文章にみごとに凝縮されている。

なぜこの提言が中国指導者に重視されるのか

胡鞍鋼博士の提言は、中国の当局者に、耳の痛いことが多い。にもかかわらず、なぜ、中国の

指導者に重視されているのだろうか。

それは、いまの中国がますます矛盾を深めつつあるから。そして、胡博士が、その矛盾をどう乗り越え、どういう政策をとって、どの方向に進めばよいのか、具体的に提案しているからだ。

改革開放以来の二〇年余りのあいだに、国内の所得格差、地域格差は信じられないほど広がってしまった。都市の中産階級や私企業の経営者など、新しい社会階層も現れた。発展する市場経済のもと、多様で複雑になった社会。そこにはさまざまな矛盾や対立がある。その中国社会を、中国共産党が一党支配している。では、中国共産党は、何を代表し、何を実現しようとする政党なのか。たった一つの党が、すべての階層や集団を代表することはできない。それどころか、ますます、幹部党員たちの既得権益を代表するだけの政党になっていく傾向がある。

胡鞍鋼博士の提言は、中国共産党の存在理由を、あらためて定義しなおそうという提案になっていると思う。

胡博士は、低所得層の人びとの就職を優先し、セフティネットを整えて社会の安定を優先し、所得の低い人びとの利益を優先する政策をとるべきだと、中国共産党に呼びかける。冷遇され見捨てられている、八億農民の利益を優先し、農民を支持基盤とすべきだと提案する。中国共産党は、革命の政党であることをやめて、市場経済のもとで弱者の利益を優先する社会主義政党に生まれ変わるべきだと提案しているのである。

いまの中国共産党が、すぐにこの提案を採用することはないかもしれない。

けれども、よく考えてみると、胡博士の提言は、中国の変化を見据え、中国の将来を見通したものだと言えるだろう。そして、真剣に検討すべき現実的な提案だとわかるだろう。

もしも胡博士の提言を無視して進むなら、中国は今後、ますます深い亀裂を抱え込むことになるだろう。中国共産党は、行き当たりばつたりの政策をとるだけで、一貫した方向を打ち出すことができないだろう。そして、支持基盤を失い、ついには統治の正統性を失ってしまうかもしれない。

私は、胡鞍鋼博士の高い学識や、鋭い現実感覚、精力的な仕事ぶりに感心するが、それ以上に、中国と世界の将来を見渡すそのスケールの大きさに感嘆する。

本書がきっかけとなって、胡博士の仕事がますます日本の多くの人びとに知られるようになり、現代中国についての理解が深まることを期待したい。

二〇〇三年三月一八日

橋爪大三郎

本書は、胡鞍鋼(主編)『中国戦略構想』(浙江人民出版社、二〇〇二年一月)の主要論文を訳出し、あわせて胡鞍鋼『中国発展前景』(浙江人民出版社、一九九九年五月)の「導言」を収載したものである。「中国戦略構想」の目次構成と、本書との対応関係を示しておく。

序文(本書序文)

- 1 中国はいかにして国民の富を生み出すのか(本書第一章)
- 2 中国はいかにしてアメリカに追いつくのか(本書第二章)
- 3 中国は知識発展型の国家戦略を進めるべきである
- 4 中国現在の経済情勢とマクロ経済の政策コントロール(本書第三章)
- 5 中国都市部における非正規就業の状況分析(胡鞍鋼・楊昉新)(本書第七章)
- 6 WTO加入後、八億農民に収益の最大化とリスクの最小化をもたらすべきである(本書第四章)
- 7 中国のWTO加入における勝ち組と負け組(馬駿・王直)
- 8 中国WTO加入の機会と脅威(Alejandro Reyes)
- 9 共産党はいかにして多数人民の根本利益を代表できるのか(本書第五章)
- 10 現代財政制度の確立(王紹光・王有強)
- 11 全国統一基本社会保障制度の確立と社会保障税の導入に関する政策提言

3月に開かれた中国の全人代表委員会(国家元首)で胡錦濤氏が首相に選ばれた。胡氏が決まると、新指導部が本格的に動き出す。年々の経済成長目標を掲げるとともに、格差を正しく取り出す。江沢民時代の懸念は、米日との関係を代々継承する胡錦濤さんに向いた。【陸俊彦】

胡錦濤は中国科学院の研究センターで活動し、現在胡錦濤氏の母校である清華大学教授を兼任する政経科学の第一人者。香港の雑誌に米朝関係に関するコラムを定期的に執筆し、政府の指導に大胆な提言を続けている。

- 12 転換期における水資源の分配に関する公共政策について [胡鞍綱・王亜華]
- 13 市場経済の秩序を大いに立て直そう [本書第六章]
- 14 反独占は社会・経済の一大変革である [本書第八章]
- 15 腐敗問題に対する地方幹部の認識について [胡鞍綱・過勇] [本書第九章]
- 16 転換期における腐敗防止の総合戦略と制度づくり [胡鞍綱・過勇] [本書第九章]
- 17 公務員汚職におけるコストと収益の経済学的分析 [胡鞍綱・過勇]
- 18 主要経済勢力としての中国の台頭とそのアメリカに与える意義 [Dick K. Nanto, Radha Sinha]
- 19 アメリカと台頭する中国 [The Rand Group]
- 20 新しい世紀の米中関係 [David M. Lampton]
- 21 ポスト冷戦の新しい枠組みを構築する中国 [Bates Gill, Nicholas Lardy]
- 22 中国の国家安全問題 [The Rand Group]

中国経済は世界に貢献

政策学者 胡鞍綱さんに聞く

長塚は4・10、90年は8・8多しかなかった。当時私は



1953年生まれ、中国科学院自動化研究所で工学博士。80年代にまとめた「中国研究報告」が大反響を呼び、以来、政策学者として活躍する。Princeton UniversityのHWP研究員。

・「一億人になった常務委員の年に、社会階級制度、少数民権を破壊する。財産の創造は難しいが、破壊は一瞬だ。中国は米朝との対立を恐れないが、私個人としては出ないが、戦争を避け、平和的交渉を続けるべきだ」と思う。と付け加えた。

・「中国は、日本が、中国に對し、日本の見方は脅威論と崩壊論の両方に偏りがちだ。中国は脅威でもなければ、恐るべきものでもないが、胡さん、冷静である。」

「中国経済は各国に機会を与えている。80年代後半の世界経済の中心に對する寄与は米朝が1位、中国が2位だ。国際貿易にも中国は同様に貢献している。外国からの直接投資でも、80年代から格差を正しく取り、世界経済の回復は相當の中国は必要だ」と胡錦濤氏の発展願望について、胡錦濤氏は中央2弾の発展願望として述べた。

イラク戦争の影響を懸念

10年の経験を通じ、心構えが異なる。総書記に就任し、胡錦濤氏は「中国は、少くも、94年に私は全体が驚かされた。94年に私は、少くも、中国が、少くも、長になれば、周辺国の大きな脅威になる。逆に経済的に繁栄感になる。」

一方で中国経済について政治的に安定した中国は、世界に役立つはずだ。中国が人類に大きく貢献する時代が来る。私も私も願う。もちろん、中国は、世界に役立つはずだ。中国が人類に大きく貢献する時代が来る。私も私も願う。